

## 西洋長屋の

### 浪人



竹内良雄

ある3DKの公団住宅に、兄貴一家の留守番がわりに住みついて早や四年たった。引越した当初から、ずっと室内の壁はむきだしである。本来なら、洋服ダンスなどの家具がところ狭しとばかり並んで、壁は完全におおわれるはずである。ところがあいもかわらず壁がむきだしであるということは、家具一式を揃えて来てくれるひとが、何年たってもいないということでもある。

ところで、団地生活は、わたしにとっていささか苦痛である。というのは、3DKの団地は、一家族が住むのを原則としていて、一人で3DKに住むというのは本来許されないため、近所の奥様方から冷たい目で見られるからである。そんなこと「我関せ

ズ」と言って、生活を送っていけばいいのだが、そうもいかない。やれ管理組合の当番だ、自治会の総会だ、等々、隣り近所とつきあいが生ずる。団地住民としての最低の義務ははたさなければならぬ。そのため、万やむを得ず、奥様方の中に混って相談会みたいなものに出席する。すると、どうやら噂のタネになるみたいだ。そのため、こちらも必要な時以外は、なるべく顔をあわせないように努力しはじめる。会社勤めしているなら、朝早く出て、夜遅くもどればいい。だがわたしの場合は、家にいることが多い。しかも夜は遅く寝て、昼近く起きる生活だ。昼近く、のそのそふとんからはいだし、洗面所へ行く。この家は一階なので、洗面場のすぐ外側が階段の入口である。そこはまた、この階段利用者十軒の井戸端でもある。なにもそこに井戸があるわけではなく、この階段利用者の奥様方の井戸端会議をする場所なのである。

今日も、奥様方が二三人集って井戸端会議のまっ最中である。朝食兼昼食を食べに行こうと思うが、そうすると、その奥様方のそばを通り抜けなければならない。夫を朝早く送り出した奥様方は、昼ごろになって出てくる若い男を冷たい目で見るとにきまっている。仕方がないから、しばらく水を飲んで井戸端会議が終るのを待つ。「茶腹も一とき」というが、水を飲んで我慢する。もはや我慢も限界になり、洗面所へ行って会議が終っているかどうか様子を見よう。まだやっている。ちょっと聞き耳を立ててみる。「……おたくのお子さんは頭がよろしくてようございますわね」

「いいえ、そんなことございませぬわ。おたくのお子さんもでき  
るって聞きましたわ」

「あら、そんなこと。でもねえ、先日、主人のお友達に先生をな  
さっている方がいらっしやるの。その方がある団地のすぐそばの  
中学の先生なんですけど、その方が主人にいますのには、団地  
の子供達の成績はすべて平均化されているっていうことですよ。  
なにかの科目にとくにずば抜けているという子がいないんです  
て。そういわれてみると、うちの子なんかもたしかにそうなん  
ですの」

「あら、そういうええばそうかもしれないわ。なんででしょ」

「その先生がおっしゃるには、やはり同じような家で、同じよう  
な生活をしているから、全体的にそうなってしまふ、ということ  
ですわ。そんなこと聞くと、あの子のためには引越して、一軒  
家に移りたいけど、なにせ先立つものがないものでしょ」

「こちらも同じよ。早く一軒家に住みたいと思っっているけど、パ  
パの稼ぎが悪いから……」

子供の成績が話されているときは黙っていた人が急にしゃべ  
る。

「隣の棟のAさん、ご存知でしょ。今度、町田の方へ引越す  
んですって。土地が四十坪で、4LDKぐらいの広さなのよ。い  
いわねえ。子供が大きくなると、どうしても4LDKぐらいは欲  
しいわ。もうひとりぐらい子供が欲しいと思っっても、3DKじゃ

ねえ」

「あら、おたくのご主人の会社、景気がいいということじゃな  
い。そろそろ引越すのじゃないかと思っっているのよ」

「ええまあ、そうしたいのですけどねえ……」

話は延々と続く。こちとらは早く終れと祈るだけである。

団地を西洋式長屋といった人がいたが、こうなると全く当つて  
いる。さしずめ、わたしなどは、貧乏長屋に住む、傘張りでその  
日その日を送っている浪人のようなものだ。

しかし、団地生活も決して悪いことばかりではない。カギひと  
つで生活ができ、気楽なところがある。家賃、管理費などが安い  
(今はだいたいぶあがつて、それでもないらしいが)。駅へ行くバスの  
便が多い。しかも日本家屋とちがって、古くなったからといって  
傾くことがない(だろう)。数えあげればきりがない。それでも、  
多くの人は喜々として団地を出て行く。ちやうど、抽選に当って  
喜々として団地に引越してきたと同じようである。やはり日  
本人にとっては、どんなに交通が不便でも庭つきの一戸建ての家  
がいのだろう。団地はアパートから一戸建ての家への通過点の  
ようである。

しかしわたしは、この団地生活からまだ抜けられそうにもな  
い。また、なにがなんでも抜け出したいとは思っていない。とに  
かくその前に、この壁を隠す家具をもって来てくれる人を捜さな  
ければならない。